

## 日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴に関する一考察

鐘, 勇  
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

井上, 奈良彦  
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/26311>

---

出版情報 : 言語文化論究. 30, pp.13-26, 2013-03-26. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン :  
権利関係 :

# 日本語における上下メタファーの体系構成 及びその特徴に関する一考察

鐘 勇<sup>i</sup>・井上 奈良彦<sup>ii</sup>

## 要 旨

本研究では、豊富なメタファー表現例に基づいて日本語における上下メタファーの種類や経験的基盤、及びその全体的な体系構成や特徴について分析した結果、次の2点が明らかになった。(1) 上下の空間位置は主に数量、時間、順序、属性、状態、評価という6つの目標領域に写像される。(2) 日本語における上下メタファーの体系構成に関しては、主に写像の対称性、写像の一貫性、基盤の多様性、基盤の競合性という4つの特徴が見られる。

キーワード：上下メタファー、日本語、経験的基盤、写像、起点領域、目標領域

## 1. はじめに

日常生活の中で、我々はメタファーという認知プロセスを介して、「具体的・身体的なもの、既知のもの」から「抽象的なもの、未知のもの」を理解しながら、頭の中に様々なメタファーを築き上げている。その中には、数量、時間、感情、社会的等級など、多くの非空間的な領域に対する我々の理解の上で大きな役割を果たしている「上下メタファー」というものが存在する。

上下メタファーに関しては、英語や中国語などの言語では既に系統だった考察が進められてきたが、日本語ではまだ本格的に研究されていない。そこで本研究では、『聞蔵Ⅱビジュアル』という『朝日新聞』の記事データベースや国語辞典から収集した様々な日本語メタファー表現例に基づき、日本語における上下メタファーの種類や経験的基盤について詳しく整理、分析し、また、その全体的な体系構成と特徴について考察したい。

## 2. 先行研究

### 2.1 概念メタファー理論と上下メタファー

Lakoff & Johnson (1980) は、「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである」<sup>1</sup>と解釈し、「概念メタファー理論」を提唱している。それによると、人間の概念体系は根本的にメタファーによって構造を与えられ、規定されている。概念体系の中に概念レベルのメタファーが存在しているからこそ、言語レベルのメタファー表現が可能となる。例えば、我々

i 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程在籍。

ii 九州大学大学院言語文化研究院教授。

の概念体系には、《楽しい状態は上、悲しい状態は下（例：「天にも昇る気分だ」、「機嫌を上げる」、「沈んだ顔」、「落ち込んでいる」）》というメタファーがある。このメタファーにおいては、「上下」は起点領域で、「哀楽」は目標領域であり、我々は起点領域に関する知識を目標領域に写像させ、上下の空間位置を通して哀楽という抽象的な感情を理解し経験するのである<sup>2</sup>。他には、《親密は近い、疎遠は遠い（例：「近い友人」、「二人の仲が近づいている」、「遠い親戚」、「友達はだんだん離れていった」）》や《重要は中心、非重要は周辺（例：「組織の中核」、「中心的な存在」、「周辺の問題」、「彼は党の中で端の方に追いやられた」）》などのメタファーも挙げられる。我々は起点領域の遠近や中心・周辺などの空間的な知識に基づき目標領域にある人間関係や重要性などの抽象的な概念を把握している。このように、概念メタファーは様々な抽象的な概念に対する我々の理解において大きな役割を担っている。

一方、以上見てきた例の中の《楽しい状態は上、悲しい状態は下》というメタファーは本研究の中心的な研究対象となる上下メタファーの典型例である。上下メタファーは Lakoff & Johnson (1980) からよく知られるようになったものであり、方向性のメタファーという上位カテゴリーに属する。方向性のメタファーとは、量、時間、社会的等級、心理状態、感情、支配力、善悪の価値観など、本来は非空間的な経験に空間的方向性を与え、それを「上下」、「内外」、「前後」などの位置関係として概念化するものである (Lakoff & Johnson 1980: 14-17、谷口 2003: 20-26)。また、方向性のメタファーは比較的単純な図式的構造が写像されるイメージ・スキーマ<sup>3</sup>のメタファーだとされている (Lakoff & Turner 1989: 99-100)。例えば、上下メタファーは上下のスキーマのメタファーである (図1を参照)。



図1 上下のスキーマ

(高尾 2003より)

我々は上下のスキーマなどのイメージ・スキーマをもとに、更にメタファーを介して心理的領域や社会的領域に関わる抽象的な経験を構造化している。

## 2.2 メタファーの基盤

概念メタファー理論では、離れた2つの領域の写像がなぜ存在するかというメタファーの基盤(動機づけ)が重要だとされている。Lakoff & Johnson (1980) 以来、主にメタファーの共起性基盤、即ち起点領域と目標領域が共起する状態を体験することが重要視され、議論されてきている。例えば、《楽しい状態は上、悲しい状態は下》の基盤としては、人間は一般に嬉しくて元気である時はまっすぐな姿勢になり、悲しくて気持ちが沈んでいる時はうなだれた姿勢になるという肉体上の共起経験が考えられる。

しかしその後、鍋島 (2011) は具体的な言語例に基づき、メタファーの基盤として共起性基盤だけでなく、同じく身体的経験に根ざしている構造的基盤と評価性基盤も存在すると主張している<sup>4</sup>。構造的基盤とは、イメージ・スキーマ、または形状が基盤となることを指す。例えば、次のメタファーは「連続体」のスキーマを共有する構造的基盤のメタファーだと考えられる。

## 《群衆は水》

- a. 駅からずっと甲子園に行く人の流れが続いている。
- b. 人海戦術
- c. 陽子は人波に飲まれていった。

(鍋島 2011 : 105より)

一方、意味には、通常の辞書の意味とは別に、いい感じや嫌な感じ、大きな感じや小さい感じといった情緒・感覚的な意味が存在する。その意味に含まれる評価性(好ましい評価性、否定的な評価性)が基盤となるものが評価性基盤のメタファーである。例えば、以下の善悪に関するメタファーにおける「白」、「黒」、「奇麗」、「汚れ」などの起点領域は既に評価性を含んでいる。

- 《善は白、悪は黒》 黒い霧、身の潔白を証明する
- 《善は奇麗、悪は汚れ》 汚れた政治家、手を汚す
- 《善は直、悪は曲》 曲がったことが大嫌い

(鍋島 2011 : 110より)

## 2.3 上下メタファーに関する考察及びその問題点

概念メタファー理論の立場からの上下メタファーの考察は Lakoff & Johnson (1980) に始まった。彼らは、広範なメタファー表現例に基づき、HAPPY IS UP; SAD IS DOWN《楽しい状態は上、悲しい状態は下》、CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN《意識がある状態は上、意識がない状態は下》、HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN《健康・生の状態は上、病気・死の状態は下》、HAVING CONTROL or FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL or FORCE IS DOWN《支配する状態は上、支配される状態は下》、MORE IS UP; LESS IS DOWN《量が多いことは上、量が少ないことは下》、HIGH STATUS IS UP; LOW STATUS IS DOWN《地位が高いことは上、地位が低いことは下》、GOOD IS UP; BAD IS DOWN《良いことは上、悪いことは下》、VIRTUE IS UP; DEPRAVITY IS DOWN《人徳が高いことは上、人徳が低いことは下》、RATIONAL IS UP; EMOTIONAL IS DOWN《理性的な状態は上、感情的な状態は下》などの多くのメタファーについて論じながら、各メタファーが確立する共起経験について説明している (Lakoff & Johnson 1980: 15-17)。

その後、Taylor (1989: 136-138) は英語における主な上下メタファーを、数量領域 (MORE IS UP; LESS IS DOWN)、評価領域 (GOOD IS UP; BAD IS DOWN) 及び支配領域 (POWER IS UP; POWERLESS IS DOWN) の3つにまとめ、Lakoff & Johnson (1980) を参考に上下メタファーに関わる共起経験について議論を重ねている。藍 (1999, 2005: 131-178) は新聞、雑誌、辞書などから中国語と英語の上下に関するメタファー表現例を収集し、それに基づいて中国語と英語における上下メタファーの分類及び共起経験について分析した。その結果、中国語においても英語においても上下は主に量、社会的等級、時間、状態といった4つの目標領域を概念化することなどが解明された。また、左 (2007) は日中対照の視点から両言語における上下メタファーの種類や共起性基盤について考察したが、日本語の分析にあたっては、単に Lakoff & Johnson (1980) で行われた英語の上下メタファーの分類に基づいて日本語にも同様な概念メタファーが存在するか否かを確認することに留まっている。最後に、山梨 (2000) は日本語の上下メタファーによって理解される主な抽象的な概念を次頁の表1にまとめている。

表1 上下メタファーの目標領域となる概念

<上>	増	良	幸	理性	支配	繁栄	尊大
<下>	減	悪	不幸	感情	被支配	没落	謙虚

(山梨 2000 : 169より)

以上、日中英語の上下メタファーに関する考察を概観してきた。上下という空間位置は主に数量、時間、社会的等級、状態及び評価などの目標領域に写像されることが分かった。一方、先行研究の問題点としては、主に次の3つがあると考えられる。第一に、メタファーの経験的基盤の分析にあたっては、殆ど共起性基盤しか注目されておらず、評価性基盤や構造的基盤などはあまり考慮されていない。第二に、中国語や英語に比べ、日本語の上下メタファーについて内省による分析は少数あるが、実生活で使われている豊富な表現例に基づく客観的で本格的な考察はまだ成されていない。内省だけによれば、事実と合わない結果が出てくる可能性がある。例えば、上述の表1に《理性的な状態は上、感情的な状態は下》というメタファーがまとめられているが、実際、日本語の場合は、むしろその正反対となる《感情的な状態は上、理性的な状態は下（例：「舞台に出て、あがってしまった」、「感情が湧き上がってくる」、「彼女はいつも落ち着いている」、「冷静沈着」など）》というメタファーが支配的だと考えられる（谷口 2003: 29）。その原因に関しては、《感情的な状態は上、理性的な状態は下》は、人間は一般に足が地についているときは心が落ち着き、高いところに立って大地を遠く離れたりとすると自然に不安になったり緊張したりしてしまうという共起性基盤を持ち、日本語において非常に慣習性の高いメタファーだと思われるからである。第三に、これまでの研究においては、内省による左（2007）の対照研究もあるが、客観的なデータと妥当な手法による日英両言語や日中両言語の上下メタファーの対照研究はまだ見当たらない。

### 3. 研究の目的と方法

先行研究から分かるように、上下メタファーに関してまだ研究に値する課題は少なくないが、本研究では、実生活での言語使用からの豊かな日本語メタファー表現例を主なデータとし、それに基づいて日本語における上下メタファーの細部に突っ込みその詳細な種類や経験的基盤及び全体的な体系構成と特徴を解明することに焦点を絞る。メタファー表現例の収集に関しては、主に『聞蔵Ⅱビジュアル』という『朝日新聞』の記事データベースに収録された10日間（2011年12月6日～2011年12月15日）の全国紙と地方紙を対象に<sup>5</sup>、上と下に関わる様々なキーワード（上の場合：上+頂+高+昇+登+浮+起+騰+挙+揚+立+うえ+あが+あげ<sup>6</sup>、下の場合：下+底+低+降+沈+落+転+倒）で検索し、ヒットされたニュースから約18500の例を集めた。また、必要に応じて『広辞苑』（第五版）（新村 1998）や『新明解国語辞典』（第五版）（金田一ほか 1997）からも少量のメタファー表現例を選出して利用した。

データ分析方法としては、まず収集されたメタファー表現例をもとに上下メタファーの詳しい種類を整理した。次に、Lakoff & Johnson (1980)、藍 (1999, 2005) 及び鍋島 (2011) を参考にしながら、必要な場合は著者の解釈も加え、各下位メタファーの経験的基盤について再分析した。最後に、各下位メタファー間の相互関係などにより、上下メタファーの全体的な体系構成及びその特徴についてまとめた。

#### 4. 日本語における上下メタファーの種類と経験的基盤

データ分析の結果、日本語における上下は、細部に相違点もあるが全体的に先行研究の結果とほぼ一致し、主に数量、時間、順序、属性、状態及び評価の6つの目標領域に写像されることが分かった。以下では、目標領域別にまとめられている各下位メタファーの詳細及びその経験的基盤について見ていく（メタファーの表記法としては、各下位メタファーを順番に丸囲み数字に続く《 》内に示し、それに基づいた表現例を小文字アルファベットで分類して示している）。

##### 4.1 数量

数量領域においては、主に次のメタファーがある。

- ① 《量が多いことは上、量が少ないことは下》
  - a. 30年以上、4歳年上、高温、消費税率を引き上げる、値上がり
  - b. 価格の下落、所得が低い、低温、支持率が落ち込む
  - c. 企業経営の透明性の向上
  - d. 知名度が低い
  - e. 外国人投資家らの不信心は高まるばかりだ
  - f. 地元では有名でも全国的には認知度が低い
  - g. 抗議の高まり
  - h. 低開発国

一見して分かるように、このメタファーは、時間、年齢、比率、金額、温度（a～b）などの数値尺度から、物の属性の程度（c～d）、人間の心理的感覚の強度（e～f）、事柄の進捗程度（g～h）などの非数値尺度までに対する我々の理解に大いに役立っている。その基盤としては、容器（コップなど）の中へある物質（水など）を更に追加するとその高が高くなり、容器の中から一部の物質を取り出すとその高が低くなるというような物理的経験が挙げられる。

##### 4.2 時間

日本語における時間の概念化については、一般に「午前」、「午後」、「寝る前に」、「食事の後」などの表現に見られるように「前後」の空間領域に関する知識が幅広く用いられているが、メタファー表現例からは、日本語には「上下」の空間位置の知識が時間領域に写像される次のようなメタファーも存在することが分かった。

- ② 《早い時間は上、遅い時間は下》
  - a. 3月上旬、上半期、上期、繰り上げ償還
  - b. 10月下旬、下半期、下期、3月以降

我々は、時間は垂直な平面に沿って展開する一つ一つの固定した場所であり、また、相対的に早い時間（過去）は空間的な上に、相対的に遅い時間（未来）は空間的な下に位置すると理解している（次頁の図2を参照）。《早い時間は上、遅い時間は下》というメタファーの形成に関しては、中国語からの影響を受けた可能性が大きいと思われ、その基盤についても、「午前」と「午後」を意味する

中国語メタファー表現の「上午 (shang wu)」と「下午 (xia wu)」から窺える。人間の主観的な感覚によれば、朝、太陽は地平線から空の最も高い位置に昇っていくため、午前の時間は「上午」と呼び、昼以降になると、太陽は次第に地平線に沈んでいくため、午後の時間は「下午」と呼ぶわけである。また、「下午」は「上午」に比べて時間が遅く、「上午」は「下午」に比べて時間が早い。ゆえに、《早い時間は上、遅い時間は下》という概念メタファーが人間の頭の中に誕生した。

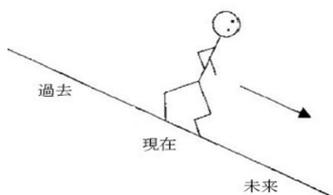


図2 過去は上、未来は下

(藍 2005 : 148より)

#### 4.3 順序

短歌、文章、書物などを2つまたは3つに分けた場合に、その内容が全体において前か後ろかにより「上下」の空間位置を用いてそれを呼び分けることができる。例えば、順序領域に関して、次のメタファーがある。

③ 《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》

- a. 上句、岩波文庫・上945円
- b. 下句、下巻

一般には、前の内容は先に完成し、後ろの内容は比較的に後に出来上がるがゆえに、このメタファーは《早い時間は上、遅い時間は下》と一貫し、《早い時間は上、遅い時間は下》がその背後で機能している可能性が大きいと思われる。《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》の基盤に関しては、短歌、文章、本などの構成としては、普通相対的に前の内容はあるページの上に、相対的に後ろの内容は同ページの下にあるというような共起経験が考えられる。

#### 4.4 属性

数量、時間、順序の領域だけでなく、上下の空間位置は物事の物理的属性や社会文化的属性の描写と理解にもメタファー的に用いられている。具体的には、属性領域において次の3つのメタファーが存在する。

##### (1) 物理的属性

④ 《音調が高いことは上、音調が低いことは下》

- a. 高音、甲高い警戒音、声のトーンを上げた
- b. 低い音、音の高低

基盤：聴覚としての音調の高低と空間感覚としての位置の高低は上下のスキーマ、即ち構造的類似性を共有している。

## (2) 社会文化的属性

### ⑤ 《社会的等級が高いことは上、社会的等級が低いことは下》

- a. 上司、昇進、上告審、高官、高裁、民間人登用、上京、昇格、最高賞、高校
- b. 部下、下請け、訴え却下、上意下達、落選、国債格下げ、低学年、高校生以下

基盤：古い時代では、体の大きい人は一般に体力があり、格闘で勝って上に乗った状態になる。また、勝った人は首領などになり、高いところに座り、高い社会的地位と権利を有する。更に、古くは、地位の高い人に敬意を表すための跪礼なども行われていた。

### ⑥ 《人徳・気品が高いことは上、人徳・気品が低いことは下》

- a. 高僧、誉れ高い、上人、上品さ、高貴な女性たち、格調高い
- b. 自堕落、商業道徳としても下の下である、下の世話、下ネタ

基盤：人徳の高い人や仏像などの礼拝の対象に会ったとき、恭敬の意を表すために、一般に頭を下げたり、ひざまずいて拝んだりする。また、文化的には、普通天国は上、地獄は下にあり、人間が死んだあと、人徳のある人は天国へ行き、品性の悪い人は地獄へ落ちる。

## 4.5 状態

状態領域における上下メタファーは主に物事の様々な状態（生理的状态、心理的状态及び事件の状态）について方向性を与えたり描写したりする。以下では、各下位メタファー及びその経験的基盤について簡単に見ていく。

### (1) 生理的状态

#### ⑦ 《健康な状態は上、病的な状態は下》

- a. 体調も上向き、不調から立ち直る（新明解）<sup>7</sup>
- b. 体調は下降線をたどっていた、過労で倒れる（新明解）

基盤：典型的には、健康な人はまっすぐに立っている姿勢であり、病的な人は横になっている。

#### ⑧ 《生の状態は上、死の状態は下》

- a. 起死回生、
- b. 命を落とす、落命（広辞苑）

基盤：典型的には、生きている人はまっすぐに立っている姿勢であり、死んだ人は横になっている。

### (2) 心理的状态

#### ⑨ 《意識がある状態は上、意識がない状態は下》

- a. 早起き、寝起きが悪い
- b. 眠りに落ちる（新明解）、下意識（広辞苑）

基盤：人間や哺乳動物は殆ど横になって眠り、目が覚めると立ち上がる。

#### ⑩ 《楽しい状態は上、悲しい状態は下》

- a. 上機嫌、気持ちを上向きにして走る、悲しみの底からはい上がる、浮かない表情
- b. 体が痛むと気持ちは沈む、ショックで落ち込んだ、沈痛、絶望のどん底、落胆

基盤：人間は一般に嬉しくて元気である時はまっすぐな姿勢になり、悲しくて気持ちが沈んでいる時はうなだれた姿勢になる。

⑪《尊大な状態は上、謙虚な状態は下》

- a. 孤高、高飛車な妻
- b. 下に出る（新明解）、卑下も自慢の中（広辞苑）

基盤：「ふんぞり返る」という言葉が横柄で威張った態度を意味するように、偉そうな人は上体を大きく後ろに反らすような姿勢で、視線がいつもより高くなり、他人よりも自分のほうが高いところにあるように感じる。一方、「腰が低い」という言葉があるように、頭を下げて腰を低くして他人の言うことを真面目に聞くというのは謙虚な人の典型的な姿勢である。

⑫《感情的な状態は上、理性的な状態は下》

- a. 気持ちが高ぶり、にぎやかにつき上がる、高揚と冷静の間、自分を奮い立たせた、ドイツも日本も熱狂的に沸き立ち開戦に賛同した
- b. 腰を落ち着いた練習、沈んだ口調、落ち着いた性格、気分も落ち着く

基盤：人間は一般に足が地についているときは心が落ち着き、高いところに立って大地を遠く離れたりとすると、自然に不安になったり緊張したりしてしまう。また、人間は興奮や緊張すると、頭に血が昇ってくる。落ち着いてきたら、血が元のところに下がっていく。

(3) 事件の状態

⑬《公的状态は上、私的状态は下》

- a. 登校、上演、上場、上映
- b. 下校

基盤：人間は学校、会社などの公的な場所では、常に他人の目を気にしており、緊張状態ないしは興奮状態になり、典型的には、背筋をしゃんと伸ばしたりしてまっすぐな姿勢を取る。下校や退勤などになると、自由自在な状態になり、体がだらけたり、横になって休んだりする。

⑭《まとまった状態は上》

- a. 全力を挙げて、国を挙げて

基盤：本来ばらばらになっている材料を組み合わせることにより1棟のまとまった建築物を建て上げていくにともない、建築物の高さは次第に増えていく。

⑮《未知状態は上、既知状態は下》

- a. 浮動票、宙に浮く日本側負担、宙に浮いた言葉
- b. 一件着着、合意の落としどころ、判断を下す、症状も落ち着いている

基盤：一般に、空中を浮動している雲、シャボン玉、落ち葉、花、雨、雪などはあちこち動いたりし、その動きなどを知るのが難しい。それに対し、地に落ちた木の葉、花、雪や、土地の中に根を下ろしている樹木や、また、地面の下に固められた建築物や橋の土台などは相対的に固定されており、把握されやすい。

## ⑩ 《完了状態は上、完了前の状態は下》

- a. 仕上げる、焼き上がった魚、できあがり、成果を上げた、6勝を挙げた
- b. 下書き、下処理、下訳、下見、下ごしらえ、下交渉

基盤：容器（コップなど）の中へある物質（水など）を追加するにともなって、物質の高が次第に高くなり、また、追加完了時にその高が最も高くなる。

## ⑪ 《影響される状態は下》

- a. 戦時下の学校生活、世界的な競争下で、法の下での平等、新たな体制下で、危機下にある国、高度経済成長下の開発、政権の影響下にある地方機関

基盤：重力というものが存在するため、接触している2つのものにおいては、常に下のものは上のものに圧力を与えられている。

## ⑫ 《支配される状態は下》

- a. 植民地支配下、日本統治下の朝鮮、軍事政権下のミャンマー、元老の指導下、柏下し決勝へ、政治家が行政マンを圧倒した選挙だった

基盤：格闘で勝った者は一般に上に乗った状態になり、負けた者は地に倒れてしまう。

## ⑬ 《正しく機能する状態は上、正しく機能しない状態は下》

- a. 選手を起用する、原発を再起動する、事務局の立ち上げ、学業と部活動の両立、私立高校、役立つ、関西独立リーグ、計画を立てる、見通しが立たない、自首の成立
- b. 企業倒産、脳梗塞で倒れた、清朝が倒れた、アサド政権打倒

基盤：建築物などが作ると、それは立った状態で機能し始め、崩壊すると、高さが下がるとともに、正しく機能しなくなる。

## ⑭ 《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》

- a. 火災が起きた、問題を起こす、思い起こす、思い浮かぶ、事実が浮かび上がる、優しい音を立てた、批判が上がった、3点を挙げた
- b. 肝心な部分が抜け落ちている、底力、社会問題を掘り下げる、沈黙、監督責任が欠落していた

基盤：ある物体が遠くから人に近づくと、人の視界の中ではその物体は次第に大きくなり、物体の上部が上に向かって動いていくように見え、また、次第に物体全体が見えやすくなる。逆に、ある物体が人から遠く離れていくとき、人の視界の中ではその物体は小さくなり、物体の上部が下に向かって動いていくように見え、また、最終的にはその物体は視界から消え、見えなくなる。

## ⑮ 《知覚できる状態は下》

- a. 災害が降りかかる、恋なんて贅沢が私に落ちてくるのだろうか

基盤：雨や雪などは空から落ち、人の視界に入ったあと、見えるようになる。

## 4.6 評価

上下メタファーにおいては、もっぱら物事の属性や状態に対して良い・悪い評価を与える次のメタファーが存在している。

## ② 《良いことは上、悪いことは下》

- a. 高い技術、高性能、高機能製品、極上の松茸料理、高品質、上質な食器、市民サービスの向上、世界最高の研究、運氣上昇、高い評価、運動機能を高める、商品市況の上昇、景気は総合的に上向く
- b. 学力低下、集客力低下、免疫力が落ちた、品質の低下、学校生活水準を下げる、行政サービスの低下、効果が低い、評価の下落、農産物価格の低迷、景気低迷

基盤：①、⑤、⑥、⑦、⑧、⑩、⑱などの複数のメタファーの評価性（価値類似性）の一般化により、好ましいことは上に、好ましくないことは下につながるようになった。

## 5. 日本語における上下メタファーの体系構成と特徴

前節では、具体的な日本語メタファー表現例に基づき、日本語における上下メタファーの各下位メタファーの詳細について見てきた。その全体的な体系構成を整理してみると、表2のようになる。

表2 日本語における上下メタファーの体系構成

上下メタファー	1. 数量 《量が多いことは上、量が少ないことは下》	
	2. 時間 《早い時間は上、遅い時間は下》	
	3. 順序 《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》	
	4. 属性	(1) 物理的属性 《音調が高いことは上、音調が低いことは下》
		(2) 社会文化的属性 《社会的等級が高いことは上、社会的等級が低いことは下》など
	5. 状態	(1) 生理的状态 《健康な状態は上、病的な状態は下》など
(2) 心理的状态 《楽しい状態は上、悲しい状態は下》など		
(3) 事件の状态 《完了状態は上、完了前の状態は下》など		
6. 評価 《良いことは上、悪いことは下》		

また、日本語における上下メタファーの特徴としては、主に次の4つにまとめられる。

## (1) 写像の対称性

上と下からの目標領域への写像は殆ど対称的である<sup>8</sup>。例えば、《量が多いことは上》、《早い時間は上》、《楽しい状態は上》、《未知状態は上》などのように概念化されている一方、《量が少ないことは下》、《遅い時間は下》、《悲しい状態は下》、《既知状態は下》などの対応している概念化が行われている。

## (2) 写像の一貫性

メタファーは身体的経験から切り離しては理解できないため、経験的基盤が何らかの点で類似している上下メタファーの間に写像の一貫性が見られる。例えば、一般に、健康な人は気持ちがよく、生きている人は意識があり、病気になった人は気持ちが悪く、死んだ人は意識がない。このような経験的な相関関係に基づき、《健康な状態は上、病的な状態は下》、《生の状態は上、死の状態は下》、《楽しい状態は上、悲しい状態は下》、《意識がある状態は上、意識がない状態は下》などのメタファーはそれぞれ一貫性を持っていると考えられる。

### (3) 基盤の多様性

これまでの上下メタファーの体系の分析では、殆ど共起性基盤しか論じられていなかったが、本研究の考察では、上下メタファーの経験的基盤は様々であり、共起性基盤ばかりか、構造的基盤（《音調が高いことは上、音調が低いことは下》）や評価性基盤（《良いことは上、悪いことは下》）も働いていることが分かった。

### (4) 基盤の競合性

様々な基盤の競合により、上下メタファーの体系においては、《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》と《知覚できる状態は下》のような、一見矛盾するメタファーも存在する。今回収集した表現例を分析したところ、前者に基づいた表現は豊富で量が多かったのに対し、後者による表現は前節で見た2例（②を参照）しかなかった。また、後者の場合、《知覚できない状態は上》という対称性をなすメタファーが現れなかった。このことから、《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》は《知覚できる状態は下》より体系的構造の中で優位に立っていることが分かる。その原因はメタファー形成時の基盤の競合にあると考えられる。雨や雪などが空の上から落ちて人の視界に入って見えるようになる現象はだれでも経験したことがあるが、雨や雪などが空に上昇していったら人の視界から消える現象は通常存在しないがゆえに、常に対称性を持つ上下メタファーの経験的基盤としては動機付けが弱いと考えられる。一方、ある物体が遠くから人に近づく、または、ある物体が人から離れていくという現象は対称性があるうえに、日常的なものであるため、相対的に上下メタファーの経験的基盤となる動機付けが強い経験である。その結果、二種の基盤の競合が生じた際に、《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》は《知覚できる状態は下》よりもメタファー体系の形成に影響力があり、優位に立つことになる。それと同様に、《未知状態は上、既知状態は下》と《感情的な状態は上、理性的な状態は下》の両メタファーは一見、《良いことは上、悪いことは下》などに見られる評価性と矛盾があるが、その根底にある共起経験は評価性に勝ち、両メタファーが形成されたわけである。

## 6. 終わりに

重力というものが存在するがゆえに、人間の頭の中に上下という安定した方向性が形成されている。また、上下の空間位置は殆ど毎日経験されており、人間にとって非常に馴染み深く把握しやすい概念である。我々はよく上下という空間概念を通して様々な非空間的な概念をメタファー的に理解している。

本研究では、多種多様なメタファー表現例に基づいて、日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴について詳しく考察した。その結果、上下の空間位置は主に数量、時間、順序、属性、状態、評価という6つの目標領域に写像されることや、上下メタファーの体系は写像の対称性と一貫性を持ち全体的に調和の取れたシステムであるが、細部には基盤の多様性や競合性による不調和が見られることなどが分かった。今後、より代表性のあるデータに基づいて、日本語の書き言葉や話し言葉における上下メタファーの詳細な分布や使用状況の解明などが望まれる。また、客観的なデータと妥当な手法により日英両言語や日中両言語の上下メタファーについて対照する研究も必要だと考えられる。更に、同じく人間に馴染み深い前後、左右、遠近などの空間的概念が写像される様々なメタファーの体系構成や使用状況についての考察も今後の大きな課題になるだろう。

## 注

- 1 この日本語訳は渡部・楠瀬・下谷（訳）（1986: 6）による。原文は次のとおりである。“The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another.”(Lakoff & Johnson 1980: 5)
- 2 これは「メタファー写像理論」に基づいた説明である。メタファー写像理論はLakoff（1987）、Johnson（1987）、Lakoff（1993）及びLakoff & Johnson（1999）で提案され精緻化されてきた現代のメタファー理論である。メタファー写像から見る概念メタファーとは起点領域から目標領域への写像である。
- 3 イメージ・スキーマとは、我々が身体を介して日々経験している様々なことの中で繰り返し現れる比較的単純なパターンを指す（Johnson 1987: xix）。代表的なものとして、容器のスキーマ、起点・経路・終点のスキーマ、リンクのスキーマ、力のスキーマ、バランスのスキーマ、上下のスキーマ、前後のスキーマ、遠近のスキーマ、部分・全体のスキーマ、周辺・中心のスキーマなどが挙げられる。
- 4 鍋島（2011: 111-113）では、カテゴリーがメタファーの基盤となるケースにも触れているが、カテゴリー性基盤は構造的基盤に還元でき、その特殊例であると説明している。
- 5 2011年の10日間の朝日新聞の書き言葉を検索対象とした理由としては次の3つがある。第一に、2011年の新聞は相対的に新しく出版されたもので、現時点の日本語の使用状況をよく反映できると思われる。第二に、上下メタファーは幅広く使われており、少量のデータから多くのメタファー表現例が収集できる。第三に、朝日新聞には社会、経済、体育、教育、政治、科学、日常生活などの様々な分野の内容があり、多種多様なメタファー表現が集められる。
- 6 ある事柄と他の事柄との関係を示す「うえ」（例：美味しいうえに、安い）、補助動詞として使われる「あがる」と「あげる」（例：できあがる、書きあげる）などはよく平仮名で表示されるため、「うえ+あが+あげ」を上に関するキーワードに加えた。
- 7 括弧内の「新明解」及び後述の「広辞苑」は例の出典を表している。出典の付いていないメタファー表現はすべて朝日新聞の記事データベースからの例である。
- 8 とはいえ、『まとまった状態は上』、『支配される状態は下』などの写像が非対称的なメタファーも少し存在している。上下メタファーの非対称性の原因の一部は、徐（2010）で認知メカニズム（生理的・心理的・物理的基礎、顕現性、マッピング及びドメインの融合と分離）と社会文化の面から議論されているが、今後より詳細な研究が期待されるだろう。

## 参 考 文 献

- 金田一京助ほか（編）. 1997. 『新明解国語辞典（第五版）』. 三省堂.
- 藍純. 1999. 「從認知角度看漢語的空間隱喻」. 『外語教学与研究』, 4, pp. 7-15.
- 藍純. 2005. 『認知言語学与隱喻研究』. 外語教学与研究出版社.
- 新村出（編）. 1998. 『広辞苑（第五版）』. 岩波書店.
- 鍋島弘治朗. 2011. 『日本語のメタファー』. くろしお出版.
- 高尾享幸. 2003. 「メタファー表現の意味と概念化」. 松本曜（編）. 『認知意味論（シリーズ認知言語学入門第3巻）』 (pp. 187-246). 大修館書店.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開：メタファーとメトニミー』. 研究社.

- 徐連. 2010. 「反対概念の非対称性の普遍性と限界—日本語と中国語における〈上／下〉の非対称性を中心に—」. 『日中言語研究と日本語教育』, 3, pp. 89-99.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』. くろしお出版.
- 左咏梅. 2007. 「『上』と『下』のメタファーについて—日中対照研究—」. 『大学院論文集』(杏林大学大学院国際協力研究科). 4, pp. 47-63.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. 1993. “The Contemporary Theory of Metaphor.” In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought* (pp. 202-251). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago and London: University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳). 1986. 『レトリックと人生』. 大修館書店.)
- Lakoff, G., & Johnson, M. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Lakoff, G., & Turner, M. 1989. *More Than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: University of Chicago Press.
- Taylor, J. R. 1989. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Clarendon Press.

## A Study of the Systemic Structure and Characteristics of Japanese Up-down Orientational Metaphors

Yong ZHONG and Narahiko INOUE

### Abstract

In this study, we analyzed the types, experiential bases, systemic structure, and characteristics of Japanese up-down orientational metaphors based on a large number of metaphorical expressions. The results showed two points: (1) Up and down are usually mapped to the following six target domains: quantity, time, order, property, status, and evaluation. (2) The systemic structure of Japanese up-down orientational metaphors has four characteristics: symmetry of mapping, coherence of mapping, variety of bases, and competition of bases.

**Keywords:** up-down orientational metaphor, Japanese, experiential basis, mapping, source domain, target domain